ブータンミュージアム通信 vol. 16

■目　次

2　月原新理事長あいさつ　月原敏博
3　ＧＮＨの来歴と概要　森 靖之
7　福井についての思い　ソナム・ワンモ
10　第１回ブータンおしゃべりサロンレポート　青山昭恵
12　日本旅行で経験したこと　カルチュン・ワンチュク
14　最近のクエンセル記事から（そのⅢ）　奥村彰二
18　２４時間営業などは幸福社会の実現に果たして？　栗原哲朗
22　小玉みさをさん絵手紙作品紹介　Part8
23　アジアの村を歩く⑯　松田宗一
25　編集後記

就任のご挨拶

特例認定特定非営利活動法人 幸福の国　月原　敏博

会員の皆様には常日頃から大変お世話になっております。さて、昨年、１２月開催の理事会の場で、これまでの野坂弦司理事長が、諸般の事情により、ブータンミュージアムを運営する（特例認定ＮＰＯ法人）幸福の国の代表を退かれる意思を示され、その後継に私が選出される結果となりましたので、この場をお借りして一言ご挨拶を申し上げます。

正直申し上げて、アイデア、行動力、判断力などに富む、当ＮＰＯの設立者であられる野坂さんと比べると、私はまったく非力であり、「長」たるに相応しい能力も有しませんが、「福井のような地域とブータンが仲良くするのは大賛成！」、「そのために私でできることであればぜひお手伝いしたい！」という、当ＮＰＯ設立時からの変わらぬ一心のみで、今回の大役をお引き受けした次第です。会員の皆様には、これまで通り、いやこれまで以上に当ＮＰＯの活動へのご支援をいただけますよう、今後ともお願いいたします。

当ＮＰＯが主な事業として運営するブータンミュージアムは、ブータン政府に正式に認められたミュージアムです。また､その収集品の多くは、いまや同国でも指折りの文化人であり学者であり、政府要人ともいえるダショー・カルマ・ウラ氏の絶大なる協力によって、初めて集めることができた立派なものからなっていることは、とても重要なことであると思っております。収蔵品のほぼ１００％は、正真正銘の本物ばかりであり、それらのモノとしての確かさは、王室を含めてどのようなブータン人の方にお見せしても恥ずかしくないものです。福井にあるこのミュージアムは、国際的に見ても､類例のない取組みと言ってよく、今年は開設されてからはや５年目になるということですが、いまでも私はこれが福井にあること自体が信じられないような気持ちになることがあります。これの創設にご尽力された初代理事長の野坂さんには改めて深く感謝したいと思います。

このような貴重なミュージアムをこれからどのように育てていったらよいかについて、ぜひ会員の皆様からも率直なご意見やご提案をいただきながら、ミュージアムの今後、そしてＮＰＯの事業を考えていきたいと思います。

重ねてになりますが、会員の皆様をはじめ、各界各層の方々には、これまで通り、いやこれまで以上に当ＮＰＯの活動へのご理解、ご支援をいただけますよう、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

//

プロフィール

1962 年，愛媛県生まれ。

現在，福井大学国際地域学部教授。

専門は地理学，地域研究。

主な調査地はブータンを含む南アジア。

//

GNHの来歴と概要（レジメ）

森　靖之

はじめに

我が国でブータンが「幸せの国」と呼ばれるようになってから意外と日が浅い。2005年人口・世帯調査の最後の質問で、96.8%の国民が「幸せ」と回答したことを根拠に、我が国のマスコミが「幸せの国」と表現するようになったようだ。

私自身がGNHを知ったのは、2000年の1月にJICAブータン事務所に赴任してすぐであったが、その当時は、我が国ではまだブータンを「幸せの国」ではなく「桃源郷（シャングリラ）」と呼んでいた。

そもそも、ブータン研究所ではGNHの起源を1972年としているが、ブータンでさえもGNHに真剣に取り組むようになったのが、1998年以降であり、空白期間が長かったのは、GNHの伝道者と言われるジグミ・Y・ティンレイ元首相によれば、あまりに当たり前のことと長い間思っていて、1998年にソウルで開かれたUNDPの会合で講演した際に、GNHに大きな反響があったことが、真剣に取り組むきっかけとなったと言うほどである。

GNHは、その後、憲法の条項にもなり、ブータンの開発の最大目標になっているが、ブータンがGNHを希求していると言っても、ブータンの国民のほとんどが幸せな状態にあるというわけではない。そのようなことはブータン側からは一度も言われたことはない。

GNHの考え方そのものも、未だ研究の途上にある。考え方だけで、それをよしとするブータン以外の国の動きもあって、我が国でも試験的に取り組んでいる地方自治体もあるが、GNHは開発論としてはまだ完成されたものではない。

上記のことを前提に、ブータン側のGNHの来歴について以下に記す。

1．GNHの構想

1961年にインド政府の予算でブータン開発五ヵ年計画が立ち上げられたが、1971年に始まる第3次五ヵ年計画からブータンの手で作成するようインドの計画委員会はブータンを訪問した。しかし、当時のブータンには各種の経済統計資料が全くなく、指導ができないまま帰国した。1972年3月に16歳で、皇太子だった第4代国王は、五ヵ年計画を担う計画委員会の議長に就任し、統計資料が全くないことから「国民の満足度」を目標とする考えを提案した。それが、現在GNHの4本の柱と掲げる ①持続可能で公正な社会経済開発、②環境の保護、③伝統文化の保全と促進、④良い統治、の元となる。つまり、GNHの4本柱は、GNHという言葉がない時代に先にあって、開発五ヵ年計画を作成する際の指針（開発の哲学）として掲げられたものである。

2．GNHの起源

第4代国王がある記者の質問に答えて「GNH（国民総幸福）はGNP（国民総生産）より重要で

＊この解説文は、2016年9月29日、JICA関西国際センターにおいて、国際開発学会・社会連携委員会が主催した講演会で、日本ブータン友好協会副会長・森靖之氏が講演したとき、会場で配られた講演内容のレジメです。ブータンの幸福度やGNHについての我が国の著作や講演などでは、必ずしも適切とは思えない表現がしばしば見受けられるなかで、森氏のこのレジメでは、ブータンの幸福度やGNHについて、納得できる論理で、簡潔に述べられているので、是非このレジメを当冊子に掲載したいと、森氏にお願いしたところ、同氏の了承が得られたので、ここにこれを掲載させていただきます。

ある」と答えたことにはじまるとされているが、ニュアンスは似ているものの、いつ、どこで発言されたかについては、ブータン側と日本側とで違いがある。一般に日本では 1976 年 12 月にスリランカで開かれた第 5 回非同盟諸国首脳会議に出席後の記者会見（第 5 回非同盟諸国会議）としているが、ブータン研究センター（Centre For Bhutan Study）では、
1979 年 9 月にキューバで開かれた第 6 回非同盟食会議に出席後の帰国途中のボンベイ空港でインド人記者の質問に答えてとある。GNH を語る日本人から出版される図書が 1976 年説であるのは、極めて不思議な現象だが、普通に考えると本家のブータンが言う 1979 年を採用するものではなかろうか。

３．国際的認知

1985 年にミヤンマーのアウン・サン・スーチー女史が、その著書「ブータンを訪問しよう（Let's Visit Bhutan)」で、1987 年に英国のフィナンシャル・タイムスのジョン・エリオット記者が GNH を取り上げているが、最も国際的認知としてインパクトが強かったのは、1998 年 10 月にソウルで開かれた UNDP（国連開発計画）太平洋地域ミレニアム会議に出席した当時の首相（閣僚会議議長）であるジグミ・Y・ティンレイ氏がその演説で GNH を取り上げたことだろう。当時のアジアでは 1997 年のタイ国に端を発する金融危機があり、通貨不信からティンレィ首相が発表した GNH への考えに参加国から大きな反響があったとされている。

ブータンが GNH について本格的に取り組むようになったのは、この会議後からなので、いまだ 20 年も経っていない。

４．GNH を国の開発目標とする環境整備

① ブータン研究センターの立ち上げ

ティンレィ首相は、韓国から帰国すると翌 11 月には GNH 研究のためのブータン研究センター（Centre for Bhutan Study）設置法案を提示し、同センターは翌年の 3 月に発足。

② ブータン開発大綱「ブータン 2020」の作成

また、GNH を国家の最大開発目標とする計画案「ブータン 2020」を五ヵ年計画とは別に 1999 年に策定した。これは、GNH の 4 本柱に「人間開発」を加えたもので、「開発大綱」と呼ばれる。

③ 五ヵ年計画での取り組み

1996 年からの第 8 次五ヵ年計画で GNH の文言が、五ヵ年計画で始めて登場、2002 年から実施に入った第 9 次五ヵ年計画では、国家開発目標として GNH の最大化を取り上げた。また、2008 年からの第 10 次五ヵ年計画でも GNH に触れ、一言一句違わず踏襲されている。

④ GNH 調査

GNH の推進者であるジグミ・Y・ティンレイ首相は、UNDP での演説後、GNH の指標化に消極的であったが、国際社会からの強い要請もあって、2005 年の人口世帯調査で 3 択（VeryHappy, Happy, Not very happy）で、「あなたは幸せか」を聞いたところ、96.8% が幸せと回答。この回答が一人歩きして我が国マスコミで「幸せの国ブータン」と呼ばれることになる。2008 年には、第一回 GNH 調査を実施して GNH の 4 本の柱を細分化して 9 つの分野の指標（精神的幸福、健康、教育、コミュニティ活力、良い政治、時間の使い方、文化の多様性、環境多様性と活力、暮らし向き）を策定。調査はその後、この 9 つの分野に基づき第二回が 2010 年に実践され、9 分野の指標のうち 6 分野が満たされていれば「幸せ」

と定義したことで、幸せな国民は40.9%に、(まあまあを入れれば89.6%)、直近では2015年に第3回が実施され、第2回と同じ範疇では、幸せは43.4%に微増(まあまあを入れれば91.2%)であった。

⑤ 憲法発布

2008年7月に発布された憲法第9条第2項に「国家は国民総幸福の追求を可能ならしめる諸条件を促進させることに努めなければならない」とし、国にその実施を義務付けた。

⑥ 計画委員会をGNH委員会に改組

2008年、それまで、開発五ヵ年計画の作成と評価をしてきた計画委員会を改組して、GNH委員会と呼称変更を行った。GNH委員会は、それまで財務省援助局の機能も加え、各省庁から上げられるあらゆる開発事業を、GNHへの貢献度という基準でスクリーニング(GNHスクリーニング・ツール)するという稀有な取り組みを行っている。

5．GNHの国際社会への訴求

① 国際会議

ブータン国内だけでなく広く海外からの参加を求めた第一回GNH国際会議が2004年にブータンで開かれた。以降2015年までに第6回実施。第二回(2005年)はカナダ、第三回(2007年)はタイ、第四回(2008年)はブータン、第五回(2009年)はブラジル、そして第六回(2015年)はブータンで開かれた。昨年実施の第6回国際会議には、国際会議が実施されてから最大の世界48カ国から約500名が集まった。

② 国連への積極的なアプローチ

2008年の国連総会でジグミ・Y・ティンレイ首相が演説し、GNHを紹介し、2010年には、幸福決議案を提出。2011年に国連は「幸福追求は基本的な人類のゴール」とする新しい開発指標を採択し、この決議により2015年までに達成すべき八つの目標を掲げた「ミレニアム開発目標」の幸福を9番目に追加した。

現在ブータンは、2015年9月に国連で採択された持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)の実践において、世界的にも模範となる取組みを進めている。

6．GNHの今後の課題

① 今後のGNH研究はどうなる

GNHの伝道者と言われ、GNHを世界に広めたジグミ・Y・ティンレイ前首相が2013年の総選挙後に議員を辞職したが、昨年ブータンで開かれた第6回GNH国際会議にも顔を出さず、会期中も全く話題にされることすらなかったと言われる。現在、ブータン側でGNH研究を主導するメンバーは、ブータン研究センターのカルマ・ウラ・センター長、キンレー・ドルジ・情報省事務次官、GNH委員会のカルマ・ツィテーム長官であろうが、GNH研究は今後どうなってゆくのだろうか。

② GNH調査費

調査資金は、第一回(2008年)、第二回(2010年)は、国連開発計画(UNDP)からの資金援助があり、第三回の2015年については、JICAが資金援助を行っている。今後はどの国から資金援助が見込まれるのか。

③ 2020年問題

1999年に策定された「ブータン2020」は、開発五ヵ年計画とは別に、GNHの完成を目指した開発大綱と呼ばれるものであり、この達成を前提として、2013年にはじまる第11次

五ヵ年計画で既に 2018 年までに他国からの援助を終了させるとの記述がある。これは現実的にはかなり不可能に近い目標である。

おわりに

GNH を語る際に、よく比較されるのが国連開発計画（UNDP）が掲げる人間開発指数（Human Development Index）である。この指数は、平均寿命、教育（成人識字率、就学年数）、一人当たりの実質所得から人間開発度を計るが、ブータンは、2015 年報告書によると世界 188 カ国中で 132 位である。幸福度という主観によって変わることを客観的に数値化することが難しいからである。

ブータンは、その中で何とか数値化して、幸福度という形で表現できるよう研究中であるが、まだ、完成の域にあるとは言えない。しかし、GNH は近代世界の経済成長優先路線に付加される要素としては発展してゆく可能性がある。

福井についての思い

福井大学教員研修留学生　ソナム・ワンモ
（注　日本語訳はブータンミュージアム事務局）

私が今、福井に滞在しているのは偶然の巡りあわせなのですが、時がたつとともに、自分がここにいるのは運命づけられていたのであり、これまでも、そしてこれからも、私にふさわしい場所はここより他にはないだろうと思うようになりました。教員研修留学生として、日本での旅をスタートさせることになったこの福井の地に、昨年１０月に来て早や７カ月余りになりますが、その間に日本、そして日本人をより良く理解できるようになりました。一歩ずつ、より深く理解できるようになるにつれて、より一層、日本そして日本人に惚れこむようになりました。なので、福井での体験を話すことは楽しいですし、いくら話してもいやになることもありません。

福井は本州の中部地方にあり、日本海沿岸に位置し大変美しく、初めての福井への旅の道中、美しい盛りの木々の緑を目にしました。また、ふと自分がきれいな空気を吸っていることに気づき、何と素敵なんだろうと思いました。その時、まるで私は、「わあ！ブータンみたい！」とはしゃいでいたようです。でも、まだその時点では、大変寒いけど、大変きれいで、また、大変奇妙だけど、大変ユニークな福井の冬が私を待ち構えているとは、これっぽっちも思いませんでした。福井には、降雪や雹の嵐、雨で特徴づけられる湿っぽい冬があります。雪はあまりにも降ったり、降らなかったりなので、冬のある時、これまで足りなかった分を埋めあわせ出来るのではと思ったくらいです。というのは、ブータンでは、ここ２０年以上、降雪を体験したことはなかったからです。でも、そんなことを口にしてからまもなくのこと、私は、雪を踏みしめた時に出る音が大変爽やかで、魅力的なので、大いに気に入っていることを悟り、大変気分が良かったです。自然が敷いた白いカーペットの上を歩くことは、多分、福井の冬で一番の私のお気に入りです。また、私は雪の上を歩きながら、人々が傘をさしているのを見るのが大変楽しいです。というのは、こちらの人々が自分に雪が降りかからないように傘をさしているのを見ると、大変興味深いからです。私の記憶では、ブータンでは特に夏の時期に、雨がかからないようにするときのみ傘をさす人は目にしますが、冬、傘をさすのは見たことがないのです。

福井は、春には桜の花が咲いて大変美しく、生き生きしています。私は桜が満開の時の足羽川べりの散策を大いに楽しみました。これが日本で体験する最初で最後の春になるのがわかっているだけに、写した写真や、あるいは道路脇を歩きながら桜を見るたびに、来年の今頃はこの美しい光景を見られなくて、さみしく思っているんだろうなあと思うと（でも、そうした思いも、あまりの桜の美しさにどこかに吹き飛ばされますが）、心が切なくなります、でも、少なくとも一度はこの地で、この春の美しさを満喫することができるんだと考えると、それだけで幸せな気持ちが、そして、福井に滞在できるこのような機会を自分に与えてくれたみなさんへの感謝の念が私の心に込み上げてきます。

春は美しいですが、ここに住んでいる人々も美しいです。私が固く信じていることわざがあります。「美とは、どんな美しいことをするかである」というものです。これまでに福井で出会った何人かの人々から感じたのは、みなさんがどなたも心

から親切で、語り口が優しいということです。言葉のやりとりで私たちが困難に直面しても、常に何とかして助けてくれようと頑張ってくれます。たぶん、こうしたことも、私がこの地の人々を美しいと感じる理由のひとつであると思うのです。ですから、私はこの福井での生活を心から楽しんでいます。さらに、大変、町が安全で、夜遅くでも動き回れますし、無事に帰宅できます。多くの外国の人が留学先として日本を選ぶ理由も当然ですね。また、日本人は大変規律正しいです。駅であれ、バスの停留所や屋外の屋台の前であれ、どこであれ、いつも人々は列を作って並んでいて、気持ちがいいものです。こうしたことも、この地の美しさをさらに美しくしています。ときどき、私は疑問に思い、自分に問いかけます。「福井の人々が美しいのは、福井が美しいからなのだろうか？それとも、福井が美しいのは、福井の人々が美しいからなのだろうか？」 おそらく、福井の何もかもが美しく見えるのは、その両側面が混在しているからなのでしょう。

プロフィール

ソナム・ワンモ

ブータンの学校教員

現在、福井大学で来年３月までの１年半、教科指導法の勉強中

ソナム・ワンモ氏（写真左）

MY THOUGHTS ABOUT FUKUI.

It is by chance that I happened to be in Fukui but with time I realized, i am destined to be here and that no other places would hAve been just right for me for all the time, that I had been and will be here. It's over seven months since I reached Fukui last October, the place from where I started my journey in Japan as a teacher training student and along the way, got to understand Japan and know Japanese more closely. The every step I moved closer into knowing them, the more I fell for them and perhaps that's the reason,I enjoy talking about my experiences in fukui and never get tired doing it over and over.

Fukui being a part of Honshu island in Chubu region ,located on the coast of the Sea of Japan, stands out so beautifully that when I was traveling to Fukui for the first time, i saw greenery at its best regardless of how nice I felt to have realized I am breathing a clean air. At that time I was like, 'wow…! It's like Bhutan' but never once had i thought during that moment that,the place would have so cold yet so beautiful and so strange yet so unique winter eagerly waiting for me. Fukui has wet winter characterized with snow fall, hail storm and rain. Snow fall occurs off and on , so much so that at one point of the time I thought I would be able to make up for the losses I had ,for it had been more than two decades that I never got to experience snowfall while in Bhutan. Having said this,It feels lovely to discover I had the stomach for the sound, which is given out when we step on the snow because it is so refreshing and appealing.Getting to walk on the white carpet laid out by the nature is perhaps what I liked about the winter here and in doing so I really enjoyed seeing people with umbrellas because I found it so interesting to see them using it to protect from the snow falling on them. And as far as I could remember I saw People in my country using umbrella, only to protect from the rain especially during summer because we never had to use it in winter

Fukui looks so beautiful and lively in spring with cherry blossom. I enjoyed walking by the side of Asuwara river, when the cherry blossoms are in full bloom. Each time I happened to see Sakura both in pictures and by the road sides, knowing that it is going to be the one and only spring I will get to experience in japan, though I get carried away by their beauty, even then somewhere right from within, it hurts to think I will be missing this beautiful sight around this time next year. Nevertheless the mere thought of being here at least once to rejoice the beauty of the spring rejuvenates in me, the sense of happiness and gratitude to everyone because of whom I have had this opportunity to stay here.

Spring is beautiful and so are the people here. I am a firm believer of the saying,Beauty is what beauty does. And based on the number of people I met so far, I found all of them kind at heart and soft at speech. Despite the difficulty we face in communicating with one another, they always try and help us in every way possible. This is perhaps one reason I find them really beautiful and I am completely enjoying my stay here. Moreover it's so safe, we can just move around late at night and return home safe and sound. So no wonder why Japan is a study abroad destination for many foreigners. People are well disciplined. It is so nice to see people standing in queue, be it at station, bus stop, in front of the outdoor market stalls or anywhere. These adds to the beauty of the place and sometimes I keep wondering and ask myself, do I find people beautiful because Fukui is beautiful ? Or do I find fukui beautiful because people are beautiful?perhaps it is the blend of both which makes almost everything seem so beautiful about Fukui.

第１回ブータンおしゃべりサロン（レポート）

ブータンミュージアム会員　青山　昭恵

ブータンミュージアムの平成２９年度事業のひとつとして、県内にはじめて長期滞在中のブータンのお二人の女性を交互にお招きし、気軽に英語で会話をする場を毎月第３日曜日に設けることにしました。お二人は、昨年１０月から来年３月までの約１年半、福井大学で教員研修留学生として勉強をされることになっています。せっかくの良い機会なので、当ミュージアム会員や、広く一般市民の方々と交流を深めていただき、相互理解を深め、今後の交流促進の一助とするとともに、当ミュージアムに足を運んでいただくきっかけになることを願っております。

今回は、４月１６日（日）１３時から１時間半にわたって開催された第１回の模様をレポートします。当日は、美しい民族衣装（キラ）に身を包んだソナム・ワンモさん（ブータンの学校教員）と参加者１０人が、当館スタッフの通訳の手助けも得ながら、また、参加者が直接、英語で話しながら、熱のこもったやりとりが繰り広げられました。当日は、参加者が日ごろブータンに関して疑問に思っていることや、興味関心のあることを質問する形で進められました。

一番関心の高かったのは、教育についてでした。具体的には、ブータンの教育制度、進級制度、学費無償制度、就学率、退学者の有無、教育カウンセラーの配置状況などについてです。ソナムさんは、カウンセラーは、ほとんどの後期中等学校（＊日本の高校２，３年に相当）には１名配置されており、今後、政府はその他の学校にも配置したいと考えているようだ。また、昔と違って最近は親も子供も学校教育の重要性を認識しており、子供たちはほとんど通学しており、また、私のこれまでの教員生活では退学者はいなかった、などと答えていました。

次に言語の問題についても話題になりました。ブータンでの言語やＴＶの事情や日本語学習の感想などについては、ほとんどのブータン人は、地方の言語は別とすると、英語に通じている、日常会話では基本的には英語を使用するが、地方言語で意思疎通ができないときは、ゾンカ語が使用される、というのはＰ．Ｐ．（小学校就学前の１年の準備教育をする学年）からゾンカ語を学校で習うので、ほとんどのブータン人が理解できるからである、などと説明。また、TV 事情については、ケーブルＴＶを通じて、ゾンカ語、英語、インド語、ネパール語、日本語、韓国語などいろんな言語のチャンネルを選択して視聴することができる。また、日本語学習については、ひらがな、カタカナ、漢字の三つの表記形態が日本語にはあり、本当に複雑で難しい、と語っていました。また、彼女の場合、子供のころ、家庭ではゾンカ語で育てられ、英語は学校に通い始めてから学習したそうです。ご存じの通り、ブータンの教育言語は英語ですからね。

その他の話題についてですが、日本の印象や県内の観光地で一番印象に残ったところについては、以下のように話してくれました。「日本には、もう一人の方と二人で、インドのデリー、バンコク、東京を経由して福井に夕方着いたのですが、全く日本語が分からない私達に、駅で居合わせた、英語の話せない中年の男性が、公衆電話を探して福井大学に電話をするのを助けてくれたり、タクシー乗り場に案内して運転手さんに行き先を説明してくれたり、その間も荷物を運ぶのを手伝ってくれたり、本当に何から何まで親切にしてくれました。それが一番強烈な印象として残っています。

観光地としては、まだ多くは見ていないが、恐竜博物館がすごくよかったです」と。

参加者の皆さんは、ソナムさんの終始丁寧な説明に熱心に耳を傾けておられました。予定していた１時間半もあっという間に過ぎ去り、楽しく、充実した初回のサロンを終えることができました。次回は、チョデンさんをお迎えして、５月２１日（水）午後１時３０分から、次々回はソナムさんをお迎えして６月１８日（日）に開催しますので、どうぞお気軽に御参加下さい。英語が不得手でもＯＫよ！

（参加費は、入館料として３００円のみ）

日本旅行で経験したこと

ローメン・ツアー＆トレッキング代表　カルチュン・ワンチュク

日本滞在中に私が非常に感動したことは，日本の皆さんが，日本固有の文化、習慣、言語、宗教、そして伝統を大切に保持しているのを目の当たりにしたことです。その意味では私は日本に匹敵するような国は他に見たことがありません。今回，私は千葉県、群馬県、福井県、京都府の４つの府県を巡りました。そこで，友人たちの家庭やいくつもの地域社会、町や都市を観察しましたが，それらが高度に発達するだけでなく全体的にバランスよく発展していると感じました。日本の皆さんが国の隅々まで発展させた多くの風景を思い出すと，国の発展に皆さんがいかに熱心に励んでこられたかが想像されただけでなく，皆さんの取組みは，世界に対して一つの貴重なお手本を示しているようにも思われました。それは，とりわけ、若い世代は，自分の出身の村々に戻って昔からの伝統や文化を継承しながらそこで生活し続ける方法を学ばなければなりませんが，それを学ぶことができるお手本ではないかということであり，そのようなかたちで伝統や文化を残すことは私は大変重要なことだと思うのです。

最近、ブータンは多くの問題に直面し始めており，若い世代にとって，仕事を求めて都市や町を徘徊するのではなく，自分の生まれた故郷に戻って暮らすにはどうすればよいかが大きな問題になっています。ですから，私は，日本人が依った制度や発展を一つのお手本として見習いながら、今日のブータンの若い世代も決して音を上げることなく，日本の皆さんが地元に留まっても長年の勤勉な働きによって成し遂げたように，遠隔地であっても若者が留まって等しく国を発展させることであり，それこそが自分たちの務めなのだと考えてくれることを期待するのです。

私が個人的に思うのは、村や町や都市の発展とともに、今日の若者には、日本人であれ、ブータン人であれ、都市や町には彼らが徘徊できる場所は少なくなっていくのではないかということです。というのは、全ての若者が熱心に励むべきなのは，日本の皆さんが成し遂げてきたように，特に遠隔地も含めて国を広く等しく発展させることであり，また，年老いた両親が世話を必要とするようになった時に，彼らを実家においたままに放っておくのではなく彼らに愛情深く寄り添うことではないかと思うからです。

話は変わりますが、私たちは福井県の中心部に作られたブータンミュージアムに案内されました。そこで､いろいろな伝統的な展示物の品々や、きれいにつり下げられたり、置かれている芸術的な品々などを見ていると、まるでブータンにいるような気持ちになりました。私は福井にこのようなミュージアムが作られたことに対し、同ミュージアムの設立者や事務局スタッフ、会員の方々に祝福の言葉を贈りたいです。この展示のおかげでブータンから遠く離れた日本の多くの人たちも、ブータンの私たちの固有の文化、伝統が今も息づいていることを体験していただく機会が得られることになります。

日本での体験についての拙文を締めくくるにあたり、満開の桜や、京都では金閣寺を、福井では曹洞宗の禅寺（永平寺）や鯖江のメガネミュージアムを､そして群馬では温泉などを楽しめたこと、そして、私はとても大切なことだと思ったのですが、福井市のおさごえ民家園では，若い世代に見せるため皆さんが保存していて私も重要だと思う古くて伝統的な農家などを見ることができて本当に楽しかったことを申し添えたいと思います。

大切なことを一つ言い残しましたが、日本への旅行を思い出に残るものにしてくれた日本の仲間たちに厚くお礼を申し上げます。

タシ・デレ（ご多幸を）

注）カルチュン夫妻は、４月上旬に来日し、約１週間、知人たちの案内で千葉、群馬、福井、京都を訪問。今回、帰国後、ご多忙の中、英語でご寄稿いただきました。カルチュンさんは首都ティンプーで老舗の旅行会社を経営，奥さんのサンゲィ・ワンモさんはティンプーの国連関係機関のオフィスに勤めておられます。カルチュンさんは約３０年ぶりの来日だそうです。日本語訳は当方のスタッフが担当しました。同社に興味のある方は、Lhomen Tours & Trekking でＨＰを検索してみてください。

おさごえ民家園（福井市）の訪問を喜ばれたカルチュンさんご夫妻
34 年前からの知己という月原新理事長と。2017. 4. 8 撮影

最近のクエンセルの記事から（その III）

ブータンミュージアム　奥村　彰二

国際腐敗認知指数

昨年の 11 月 11 日、ブータンのツェリン・トブゲィ首相は、今後のブータンの政治に、ゼロ・トレランス（いかなる違反も許さず、規則を厳格に守る考え方）の適用を主張しながら、ブータンは国際腐敗認知指数の順位を、2020 年までに 7 ランク上げて、現在の 27 位（2015 年データ）から 20 位になることに挑戦すると述べた。これはその 2 日前、OECD とアジア開発銀行の共催で開いた地方セミナーで、23 カ国の代表に演説されたものである。

腐敗認識指数（Corruption Perceptions Index, CPI）とは、国際的な非政府独立組織トランスペアレンシー・インターナショナル（TI）が、世界中の国々の政治腐敗を調査・研究して、その政治腐敗を評価し、その結果を数値で表したものある。その評価値は、1995 年から毎年、ランキングとして世界中に公表されている。人々の行いや意識についての評価をして、それを数値で表して、ランキングにしている例に、幸福度やジェンダー・インデックスなどがある。これらに共通して言えることは、その結果を解釈し、何かに利用しようとする側が、そこで何が適切に評価されているか、十分に見極めなければならない。ランキングの順位は自国に変化がなくても、他国の状況の変化によっても上下するものであり、順位でなく、この場合には腐敗認識指数そのものの大きさで、目標を設定することで十分に意味のあるものと考えられる。しかし、ツェリン・トブゲィ首相はブータンの順位をそのまま受け入れて、自らの目標の設定に利用している。

国王はこれまで、これから政治を担う青年に事ある毎に、政治腐敗についての警告を述べている。この小文の第一回目で書いたことであるが、昨年 6 月ブータン王立大学の 9 つのカレッジの卒業生に対する祝辞の中で、「国王が今深く心配していることは、政治の汚職である」と述べている。

ブータンの国の政治や開発の理念とされている GNH（国民総幸福度）を評価する場合、2010 年頃から 9 つのドメイン（領域）に分けて、調査結果を分析されているが、その一つが good governance (良い政治) である。また以前から GNH の 4 本の柱の一つが、「良い政治」であり、首相が「良い政治」の実現を目指すこと自体は、ごく当たり前と受けとれる。そこで外国の一つの機関による自国に対する評価の国際的順位を、自国の目標に利用したのは、国民に理解し易いと判断したからであろうと思われる。

ブータンの順位 27 位は、ブータンの周りの南アジアの諸国と比べて、ひときわ高いものである。インド、タイ：76 位、パキスタン：117 位、バングラデッシュ：139 位など。

なお、日本の順位はアイスランドと同順位で 18 位 /（167 カ国）（2015 年データ）となっている。国際的に比較されるランキングとして、これは比較的高く評価されたと言える。なぜなら、最近のランキングで日本は、国連の幸福度：51 位、次に述べる世界ジェンダー・ギャップ指数（2016 年）：111 位、報道の自由ランキング（2016、2017）：72 位、などであるからである。

世界ジェンダー・ギャップ指数

1990 年頃から、社会における男女性差別や男女共同参画社会などを問題意識とするジェンダーについて、いろいろな国際的な機関が、調査とそれに基づく批判や改革案の公表がなされるよ

うになってきている。日本においては、十数年前ほどではないにしても、各種組織・機関において、ジェンダーの考えがかなり浸透し、議論されている。ブータンにおいては、女性の社会的な地位の向上を目指した社会的活動について、クエンセルの記事としてしばしば現れてきている。

2016 年 12 月 16 日のトップの記事として、「ブータン、ジェンダー・ギャップ指数の低下」という表題で、最近発表されたジェンダーに関する報告を論評している。

ジェンダー・ギャップ指数というのは、国際機関である世界経済フォーラムが、経済、教育、政治と保健の 4 つの分野のデータから、ジェンダー平等性を評価したもので、毎年その指数値を国際的ランキングとして発表している。

この記事でジェンダー・ギャップ指数の国際的ランキングで、ブータンは、2013 年の 93 番目から、2016 年の 121 位に順位が下ったことを、残念な結果として述べているとともに、そこでブータンについて指摘された課題を国民に伝えて、ブータンにおける女性の平均的な社会的地位をより高くしようとする国民の意思を喚起している。記事の一部を転機すれば、

「報告は、ブータンの健康、教育、経済と政治において、女性に対する著しい不均衡があることを示した。ブータンは南アジアでは、世界で 143 番目のパキスタンのよりは、かろうじて上になっているだけである。

ブータンでは、女性の労働力としての貢献、推定獲得収入と賃金の男女平等性などで、格差が広まっていることが、報告で強調された。

しかし、肯定的な点では、国内で女性の専門的職業従事者と技術的労働者の数が増加したことであった。またブータンは、いくつかの国と比較して、リテラシー（読み書きや算数などの基本的な能力）におけるジェンダー格差はより小さかった。

国民の半分の人口の総合的能力の発揮に向けた発展において、遅れを取っている」

などと、書かれている。

昨年 9 月に、地方行政の統一選挙が行われたが、その際、国として女性がなるべく多く立候補するよう促す動きのある記事があった。確かに各ゲオの地区長（ガプ）や副地区長（マグミ）などの地域の立候補者は、5 年前と比べて増えたが、実際の当選者は、あまり増加しなかった。

現在、ブータン国内で政治的に高い地位にある女性としては、公共事業大臣のドルジ・チョデンさん、腐敗防止委員会議長のキンレィ・ヤングゾムさん、国会議員として公共事業大臣の他に 5 名（国民議会の 4 7 名のうち 3 名と国家評議会の 25 名のうち 2 名）、ディク・チワン政党の党首リリ・ウォンチュクさん、ダガナとチランの 2 人の県知事がいることを挙げているが、このように政治的に活動している女性の数が少ないことを強調する記事になっている。

なお、日本のジェンダー・ギャップ指数の順位は、2015 年の 101 位から、2016 年は先に述べたように 111 位と過去最低になっている。

世界報道の自由ランキング

ブータンが国として、世界的なランキングに高い関心を示した 2 つの例について述べたが、もう一つ追加したい。それはごく最近の 2017 年 5 月 6 日の記事である。ここで出てくる世界報道の自由ランキングは、国際 NGO の「国境なき記者団」が各国の報道の自由を評価し、毎年世界ランキングとして発表しているものである。なお 2017 年の評価した国の数は 145 カ国である。

ツェリン・トブゲィ首相は、5 月 3 日、世界報道の自由の日を守るために集まった 100 名以上のジャーナリストに対して、倫理的で、責任のあるジャーナリズムについての詳細な演説を行った。

ブータンは 2017 年度の世界報道の自由指数のランキングにおいて、昨年度の 104 位から 10 の順位を上げて 94 位になったことは、非常に喜ばしいこととして、さらにこの順位を上げようと、首相は各種報道関係者を激励した。さらにブータン特有のプレス業界の問題を指摘しながら、報道関係者の報道の自由を擁護する発言を繰り返した。

「我々にも、さらにやるべきことがあるが、報道はもっと自由である必要があり、報道の仕事はもっと評価され、安全でなければならない」

「報道の自由は民主主義にとって、非常に重要である」

「メディアの現場担当者が、報道の自由を、メディア産業の持続可能性の問題と、自由に高い人員削減率にできる意味であると、誤った解釈をしたために、メディア関係者の多くがランキングを非難していることに驚かされた」

「もし報道関係者を脅かしたり、怯えさせる政治関係者、または公務員に出逢ったならば、私に話して欲しい。私が知らなければ、そのことを調査することができない」

「新聞発表のできるメディアの強化に政府が関わることは、メディアを強くする一方で、報道の自由を侵す危険性があるかもしれない」

その他首相は、メディア産業の現在の営業的な問題点をいくつか指摘し、メディア産業の発展を期待するメッセージを聴衆に伝えた。

ブータン王立大学の入学定員

2017 年 2 月 14 日に、ブータン王立大学（Royal University of Bhutan: RUB）の各カレッジについて、今年度の入学定員の昨年度からの増減が公表された。RUB の全体で、2016 年度の 2306 人から 2017 年度の 2507 人の入学枠となり、201 人の増加になった。この中に、昨年 6 月に既に発表されている東ブータンの 2 つの新設のカレッジが含まれていた。モンガルのギャルポイジン・カレッジと、タシヤンツェのリグネ・カレッジであり、それぞれ 80 人と 10 人の受入れ学生となっている。カレッジが新設されたと言っても、入学定員が 10 名では、余りに少な過ぎるので、これらは最終な決定ではないものと考えられる。また、昨年に発表されたこの 2 つのカレッジの専門性が全く変わっていたので、その点でもやや不可解な内容であった。外国の政府から奨学金が支給されて、外国の大学に留学する学生についても、教育省はまとめて管理してるので、その留学生定員枠として昨年の 203 人から今年度の 194 人になったことが同時に報告されている。RUB の入学定員と外国の留学生となる学生数を合わせて、2701 人が今年度の進学の定員として設定されている。今年度のクラス XII (12) の試験合格者が 8830 人であり、この人数が大学進学資格者となっている。RUB 以外に、医学系の大学や職業訓練校としての技術専門学校や芸術工芸系の専門学校などにも進学する学生もいるが、これらの受入れ人数も限られているので、大学進学希望者にとっては、この RUB の定員ではかなり厳しいであろう。

昨年の 6 月に政府が発表したとき、新設の大学が 3 つになっていたので、残りの 1 大学は、学生を受入れる準備が間に合わなかったのかもしれない。また、各大学の学生の内訳として self-funding student（自己負担学生）という学生枠が、いくつかの大学について明らかにされている。従来ブータンの大学は無料と言われてもいたが、この自己負担学生は 2011 年から現れて、その学生には授業料と寮費を支払う義務が伴う。王立ティンプーカレッジ（RTC）は RUB のメンバーに組み入れられているが、これはブータン初の私立大学であり、学生は原則的には授業料や寮費を払う必要があると思われる。

RUB、その他のブータン国内の高等教育機関と

政府が管理する外国の留学先に行けない高等教育への進学希望者が大勢存在するが、その多くがインドを含む周辺国の大学に私的に流れていくものと思われる。昨年ドプケィ首相は、インド国内を主とするそれらの大学には、教育条件のあまり良くない大学がたくさんあり、外貨も消費されることなので、国内に大学をもっともっと増やさなければならないと主張した。そして東部地区だけに偏っているという理由で野党議員が批判する中、新たな３つのカレッジの創設を発表した経緯がある。

２４時間営業などは幸福社会の実現に果たして？

ブータンミュージアム　栗原　哲朗

１　２４時間営業なんてどうしてあるの？

私たちの周りを見ると、いつのころからか２４時間営業の店舗がどんどんと生まれてきました。コンビニ、スーパー、飲食店など・・・こうしたビジネスモデルの背景には、経営効率の向上、飽くなき利益追求、他店との競争からか、はたまた、消費者からのニーズに応えるためか、理由はいろいろあるのでしょう。

いずれにせよ、２４時間営業が存在しうるのは、それを利用する消費者がいるからに他なりません。つまり、通常なら眠っている時間帯（平均的には午後１０時～午前６時の時間帯か？）に、起きて何かしらをしている人がいるからです。この何かしらをしている人は一体何をしているのでしょう。もちろん働いている人も遊んでいる人も、勉強をしている人もいるのでしょう。

深夜労働に従事している人には、当然、深夜警備業務、消防・警察業務、電力会社や化学品メーカー、深夜タクシーなどで働いている人々なども含まれるでしょう。業務の特殊性から、深夜警備や、消防署などの深夜業務はもちろん無くせないでしょう。でも、深夜労働を敢えてしなくてもよい業種も多いのではないでしょうか。もちろん、そのためには、消費者がそうした深夜労働が提供するサービスを求めないことが大切であることは言うまでもありませんが・・・

ところで、現在、２４時間営業という業態の中で仕事をしておられる方々は、多くの犠牲を払い、いろいろな不安や問題を抱えていることでしょう。例えば、健康を害さないか、生活のリズムの違いから家族関係や友人との人間関係などが悪くならないか、落ち着いて自分の時間を持てないことなどなど、多くの問題があることは想像に難くありません。そういう意味では、２４時間営業の仕事に従事している方々の生活の質（クロリティ。オブ・ライフ）は、低下せざるを得ないのではないでしょうか。

深夜労働などに従事する人の中には、通常の日勤を終えた後に、さらにアルバイトなどとしてそうした労働に就き、少しでも収入を上げたいと頑張っておられる方々もおられるでしょう。そうした人の中には、収入が増えた分、生活の質は上がるのだと言われる方もおられるでしょう。個人の価値観の問題なので、なかなか難しい問題です。

２　２４時間営業は生活に必要不可欠？

ところで、これまで私たち消費者は、日常生活の中で常に飽くなき便利さ、快適さを求めてきました。それは、物やサービスを提供する側が、そうしたものを次から次へと競って開発し、市場に送り出すから消費者がそれを欲しがったという側面もあるでしょう。また、一方、消費者の側も、さらに便利なもの、快適なものを際限なく欲しがったから、物やサービスルを提供する側がその要望に応えるために頑張ってきたという両面があるのでしょう。

２４時間営業は、消費者にとっては欲しいと思った物をいつでも購入できるという点では、至極便利なものです。コンビニなどはまさに、ほぼ日常生活で必要なものがコンパクトに詰まった、しかも勝手の分かったマイ冷蔵庫でありマイ貯蔵庫が、自宅周辺のみならず全国に、しかも、１００m、あるいは２００m間隔といった具合に存在するのですから、そりゃあ、便利も便利でしょう。でもこの便利さと言うのは、果たして正常なのでしょうか。行き過ぎなのではないでしょうか。

この便利さ、快適さを実現するために、深夜労働などに従事する多くの人々が犠牲になっているのです。

この２４時間営業というものがなかったら、消費者は果たして生活に困るでしょうか？私は困らないと思います。ただ、困らないように、普段からしっかりした計画的な消費行動を心がける必要はあります。仮にどうしても欲しいものが深夜に手に入らなくても、我慢してやりくりすればよいのです。それくらいの我慢の精神や忍耐力を人間は持つべきなのです。そういう意味では、人間は、以前よりも、わがままになり、忍耐力や我慢の精神が無くなったのではないでしょうか。いつでも何でも手に入るというのは、子供に欲しいものを何でも与えて甘やかすことと同じではないでしょうか。こうした子供はきっと将来何らかの問題を抱えることになるでしょう。

３　通信販売と宅配業務の抱える問題

さて、最近、２４時間営業とは別の問題が世間では問題になっています。それはインターネットの普及とともに広がるネット通販やテレビショッピングなどの増大に伴う宅配業務の爆発的増大です。しかも時間指定の宅配サービスなどもあり、宅配業務に従事する人はパンク状態です。通信販売を利用する人は、それが安いからとか、買いに行く手間が省けるとか、近くにはない品物が手に入るとか、忙しくて買い物に行く暇がないからなど、いろいろな理由から利用するのでしょう。

これも無くすことは無理かもしれませんが、あまりに安易に依存し過ぎてはいないでしょうか。小売りが何でも通信販売になったら、そのうち店舗での対面販売の小売業者は消失するかもしれません。ただでさえ、地方の商店街などは既に衰退し疲弊していますが、さらに輪をかけて衰退する恐れもあります。地域社会の崩壊につながるかもしれないのです。売る人と買う人の会話がなく、安く、早いからなどという理由から通信販売を利用し、誰と会話することもなく物が届くという暮らしは、果たして、人間の幸福につながるのだろうかと疑問がわきます。買い物をする本当の楽しみを味わう時間も持てないほど、忙しい日本人の働き方や労働環境にも大いに問題があるでしょう。真の働き方改革を大いに進め、ワークライフバランスを真剣に改善する必要もあるのです。

４　今以上の快適さ、便利さの追求は必要？

日本はすでに成熟社会です。でも経済格差の問題は今なお日本社会にもありますから、国民すべてとは申しませんが、平均的な日本人は、すでに人間に基本的に必要な快適さ、便利さを十分手に入れたのではないでしょうか。いや、十分すぎるかも知れません。これ以上の快適さ、便利さを求めるのは、決して幸福社会の実現に寄与しないと思います。むしろマイナスでしょう。例えば、リニア新幹線です。あれは今の日本に本当に必要な交通手段なのでしょうか。将来的に東京、大阪間を１時間で結ぶというもののようですが、なぜそんなに早い移動手段が必要なのでしょうか。現在の新幹線で十分ではないのでしょうか。本当に１時間で移動する必要のある限られた人は飛行機を利用すればいいでしょう。

仮に１時間で結ばれれば悪便利？ではありましょう。でも早くなって浮いた時間を人は何に使うのでしょうか。多分、今の日本では、その時間はさらに働くのではないでしょうか。現在でも働きすぎの日本が、さらに働くのでしょうか。また、リニア新幹線で旅行をしたとしても、決してのんびりと旅情を味わえる乗り物ではないでしょう。旅情に浸るには、のんびりとした時間の流れが必要なんです。私たちは、陸上では、今以上のスピードは求めるべきではないと思います。それどころか、生活のスピードをもっとスローな生活に戻す必要があります。生活の速度を上げるよりも下げ

る方が、今の日本人の生活をより幸福なものにすると思います。

5　人間にとって大切なものが犠牲に・・・・

元来、自然の中で他の生き物と共存して生きてきた人間は、日中、活動し、夜はぐっすり眠っていたことでしょう。いつ頃からか、日本人はのべつまくなく働き、夜、活動する人間が増えてきたのです。家庭の中は、みんな生活のリズムがばらばらで、家族そろって食卓を囲む時間も激減しているのです。そうした生活の変遷は、戦後の経済復興、さらには高度経済成長、バブル経済という流れの中でそうなってきたのでしょうか。また、その後の経済停滞期の中での厳しい生き残り戦争の中で、２４時間営業だの、年中無休だのと言って、なりふり構わず、みんなが無理をして、しかも何か大切なものをすべて犠牲にしながら、今日に至ったのでしょうか。

さて、先ほどもちょっと触れた年中無休という店舗や事業者も増えつつあります。これもいろんな問題を孕んでいるのです。コンビニやチェーン店などはもちろんかなり前から年中無休ですし、昨今はデパートやショッピングセンターなども初売りと称し、元旦から営業したりもしています。年中無休なんてそもそもあり得ません。人間が働く社会に休日があってしかるべきなのです。私が子供のころ（昭和３０年代）は、さすがに正月３が日などはほとんどの店が休んでいたと思います。ですから、お節料理も必要だったのでしょう。日持ちするおせち料理を家族みんなで協力して作り、餅をついたりしたのです。それは一大行事で、楽しく、それぞれの家庭の味があったものです。今は、正月３が日でも営業している店が多くあるため、おせち料理を昔ほど作る必要性がなくなってしまったのです。最近、忙しい家庭ではおせち料理を作ることもなくなってしまいました。その代わりに、スーパーやデパートで購入したり、宅配でおせち料理のセットを取り寄せるケースも増加しつつあります。ここでもまた、宅配が活躍するのです。正直、私も試しに購入したことがあります。でも後悔しました。まったく風情がありません。感動もありません。それよりも、家庭で作ったおせち料理を家族そろって、「今年のおせち料理、うまくできたね、とてもおいしいね」なんて言いながら食べる方が余程、幸せではないでしょうか。最近は、家庭でおせち料理を作らないので、それぞれの家庭のおせち料理の味を知らない子供や、それらの作り方を知らない子供も多いのではないでしょうか。

日本各地に古来からあった伝統料理も世代間で継承されることなく、消滅の危機に瀕しています。また、正月早々から働きに出なければいけない家庭では、せっかくの団欒の機会をさみしく過ごすことになる子供も多いことでしょう。話はそれましたが、年中無休だと言って、正月３が日も営業をするようなことは、働く人にも、また、その家族にも、そして消費者にも決して幸福をもたらしません。

6　真の幸福が体感できる新しい生活スタイルに転換しよう

こうした社会経済のありかたは、もう終わりにしませんか。もっとみんな楽にゆったりと、休む時にはみんな休み、質素に暮らしませんか。もっと自分の時間を多くもち、家族や友人、地域住民との触れ合いや交流の時間、スポーツや芸術、物作り、読書などの趣味の時間、めい想の時間、自家菜園での農作業の時間などに充てるような生活をしませんか。その方がきっと人間らしく、本当の意味で幸福な社会をすごせるのではないでしょうか。こうした生活の中でこそ、子供たちもまた、のびのびと健やかにたくましく、育っていくでしょう。

その実現には、私たちはすべての人間活動にお

ける意思決定において、単に利益や費用対効率の最大化を目指すのではなく、人間社会に本当の幸福をもたらす道を選択するよう大きく方向転換する必要があると思います。

小玉みさをさん絵手紙作品紹介　Part8

ブータンは花の国　幸せの国

道端には白い可憐な野いちごの花

ピンクや青のさくら草が一面に咲いています。

高山には高山の花が咲き、秋には風に揺れるコスモスの花。

本当にブータンは美しい国。

いつ行っても花が咲いている花の国。

美しい花々が目に浮びます。

私の心の中には、ブータンの風が吹き、花が咲いています。

毎月第1土曜10時から、ブータンミュージアムにて絵手紙教室を開催中。
２０１７年４月１日より、講師である小玉みさをさんの個展も開催しております。

紛争で廃墟になった街に復興の重機が入る

アジアの村を歩く

１６　祈りの島　スリランカ

写真・文　松田宗一
（写真家・福井県大野市在住）

ジャフナ

首都コロンボから北部の町まで８時間

飛行機の予定が悪天候のためバスで移動

地雷原の看板を過ぎ、町の入口で軍隊による

パスポートの提示を求められジャフナに入る。

検問の間、待たされた時間は

緊張感もあり短くはなかった

朝のメインストリート。破壊された建物、街路の整備が進む

パーク湾を望むジャフナ。乾物が並ぶ魚店

町は２００９年内戦終結。復興の兆しの中、
穏やかな朝が明け、人々は動きだす
賑やかさはないが、静かな胎動を感じる

編集後記

新緑が目にしみる季節となりました。さて、ブータンミュージアムも今年１１月には、節目の５周年を迎えます。これまで、ブータンの紹介とともに、ブータンとの交流にも力を注いできました。今では、県内大学で教育指導法を勉強するため、２人のブータンの方が来年春まで長期滞在するまでになり、ブータンの人の生の声をいつでも聞ける状況にあります。今回、そのうちのお一人をお呼びして、いろいろとお話を伺う機会を持ちましたので、早速、その模様をレポートいたします。また、来福されて早や半年を経過しましたので、日本での生活についての感想の原稿もお願いしました。日本語学習などで超多忙にもかかわらず、快くお引き受けくださいました。

ところで、人的交流では、この４年余りの間に、ブータンから本県へ、政府関係者、地方行政職員、大学の先生方、学生、小学生、留学生、漆関係職人、旅行業関係者など、数十名の方々にお越しいただいております。さらに、８月には、本県としては２度目の地方行政研修団をブータンから受け入れる予定で、１２人の方が約２週間滞在予定です。また、ブータン訪問については、これまで６次にわたる訪問団を派遣し、７月には第７次の派遣を予定しています。相互往来が深まる中で、ブータンのリアルタイムの情報や生の声をお届けできる機会がますます増えるだろうと大変うれしく、また、今後の交流の発展に大いに期待しているところです。眞子様も６月上旬にブータンを訪問されるということで、益々両国の交流が深まることでしょう。

（ブータンミュージアム事務局長　栗原哲朗）

【発行日】2017年６月１日
【発行元】
特例認定特定非営利活動法人 幸福の国
〒910-0005 福井県福井市大手 3-15-12
ブータンミュージアム内
TEL.0776-22-0011 FAX.0776-22-0010
ホームページ http://bhutan-npo.asia/
Ｅメール info@bhutan-npo.asia
ブータンミュージアム
〔定休日〕毎週月曜日〔開館時間〕ＡＭ11：00～ＰＭ5：00

ＪＲ福井駅から徒歩約１０分